

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 6 日現在

機関番号：34314

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2013～2016

課題番号：25370097

研究課題名（和文）アジアの観点から見た 国史学 の比較思想的な研究 仏教文物の位置づけを鍵として

研究課題名（英文）Japanese Historiography from the Asian Perspective: The Position of Buddhist Cultural Relics as a Key to Understanding

研究代表者

佐藤 文子 (SATO, Fumiko)

佛教大学・歴史学部・非常勤講師

研究者番号：80411122

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,800,000円

研究成果の概要（和文）：日本での歴史編纂は模倣によってはじまり、長い間漢学的フォーマットの影響下にあった。そこに変革をおこしたのは明治維新であり、日清戦争の戦勝を契機としてさらに価値観が変化した。大東亜共栄圏という構想が出現するのと連動して、日本には中華の影響がなかったという思想が普及し、近代の日本特殊論が成立する。

終戦後、日本に対して中華の影響がないとする思想は修正を迫られ、両者の関係について再評価がなされた。近代日本が創り出した古代像を変更しないために、隋唐を強大な大帝国と評価するようになった。この学説は1970年代半ば以降教科書に採用され、いま現在の日本史分野に定着したと考えられる。

研究成果の概要（英文）：In Japan, historiography began as an imitation of Chinese method and was influenced for several years by the format used in the study of Chinese classics. However, this changed with the Meiji Restoration and a further change in values occurred after Japan's victory in the Sino-Japanese War. With the emergence of the Greater East Asia Co-Prosperty Sphere concept, the idea that Japan had not been influenced by China gained currency and the modern theory of Japanese exceptionalism developed.

After the Second World War, Japan was forced to revise the idea that it had not been influenced by China and the relation between the two countries was re-examined. The only way to avoid changing modern Japan's view regarding ancient Japan was to regard the Sui and Tang dynasties as large, powerful empires. This theory was adopted in textbooks from the mid-1970s and is now firmly established in the field of Japanese history.

研究分野：思想史

キーワード：史学史 日本特殊論 日本固有論 黒板勝美 古代像 人文学史 国史 教科書

1. 研究開始当初の背景

(1) 近代日本の自国史である 国史学 は、明治維新直後からの試行錯誤の末、日清・日露の戦勝を機にすがたを顕し、学問体系に変革をもたらした。学者たちは「東亜」の外縁を实地調査し、旧来の中華と辺土という秩序を越える世界観を見いだそうとした。そのなかで日本が世界に誇るべき財の中核に仏教文物を据え、自国史の筋立てに組み込んだ。現在の日本史分野は根底にこの流れを承けているが、かかる成立の思想史的経緯が相対化されないままセクト化・細分化し、閉塞した状況にある。当該研究は、史資料の調査と实地踏査によって 国史学 の結構の構築過程を検証し、その結構を支えている思想を解明しようとするものとして開始された。

(2) 近年、建築史・美術史の立場から学問史を回顧し、相対化しようとする動きはあるが、現在の日本史に直結する二十世紀の 国史学 を俎上にあげ、そのメタヒストリーに取り組んだ研究は乏しい。専攻が多分野に亘り、各人が複眼的な視野を持つ研究班を構成することが、有益な成果をあげることができるかと予測された。

2. 研究の目的

(1) 国史学 は、自国の歴史を語るという使命をもって構築された叙述体系である。そのすがたかたちは、いくつかのプロセスを経て、また複数勢力のベクトルによって形成に至ったものである。この研究は、国史学 が持っているフォーマット(構造・様式)の思想について、明治維新以降の政治思想の展開を視界に置いて解析し、それによって現在の日本史の方法を規定している思想を解明することを目的とした。

(2) 日本の 国史学 が持つ特徴には、仏教文物とそれにまつわる歴史とをストーリー

ーのなかに組み入れて結構が成されてきたという事実がある。これは、アジア諸国で成されるナショナルヒストリーのなかにおいて、日本の 国史学 のみに見られるきわだった特徴である。またこのことは、歴史概説・歴史教科書の章立てはもとより、現在の日本の人文知の構造に影響を及ぼしている。いまこの問題に取り組むことは、日本にかかわる「学」の、孤立したパラダイムを解体し、広領域的な議論を可能にしていくために不可欠な作業であると考えた。

3. 研究の方法

(1) 研究代表者佐藤文子はすでに、明治以降の歴史教科書の調査を手がけ、そこに以下の流れがあることを発見していた。まず、明治初期の歴史教育においては、教科書の執筆者は漢学・国学の学者が担当していたが、叙述内容には、新政府の由緒を説明する要素が編入されていく。そこで、世界に誇るべき財として選ばれるのが、仏教建築や仏教美術であった。しかし、江戸時代以来の歴史叙述においては、そもそも仏教文物を国家の歴史のなかに位置づけるという経験がなかった。そこであらたに仏教という要素を取り込みながら構成する 国史学 が必要とされるようになる。

佐藤は、古代史研究の立場からこの作業に取りかかったが、この問題は日本史・仏教史という小領域の問題にとどまらず、人文学体系の構造とそれに関わる思想とを解明する上で、重要な課題であることに気づいた。そこで在外研究者を含む他領域の研究者らとの議論を試み、問題を共有化しつつ、また他の複数の研究班と情報交換や連携をしながらこの課題に取り組んだ。とくに池美玲(韓国芸術総合大学講師)・手島崇裕(韓国慶熙大学校助教授)が研究班に参加したことで、研究代表者が持たない専門的見地から、当該科研の成果に直接つながる研究協力を得ることができた。

(2) 国史学 の構築と展開の過程をアジア的観点から解析する上でのポイントは、次の3点であった。

近代国家のなかでの仏教文物の位置づけの成立

国史学 の結構のなかでの仏教史の位置づけの成立

日本の学問における、中華と辺土という世界観から超越したアジア観の成立

これらについて、宗教史・交流史・美術史その他諸分野の分担・連携・協力を得て、研究計画を進めた。佐藤が事前に得ていた研究成果と予備調査の所見から、研究の手順を定め、パリ万博が開催された1900年頃、黒板勝美『国史の研究』各説の部が発行された大正7年(1918)年頃、学者らが東アジア周縁地域の現地調査を実施した昭和初期(とくに1930年代)に焦点を当て、資料調査・現地踏査・現地文物調査を行うとともに、さらに議論を重ね、成果を総合化した。

4. 研究成果

(1) これまでの日本の歴史学分野は、創造する学ではなく倣う学という特質を持っており、規範性が高い状態が継続してきた。また地域別時代別の講座制のもとで、著しく研究分野のセクト化およびテーマの細分化が進行してきた。当該科研はこのような状況下において、日本およびアジアの「史」を素材とした学問史にとりくみ、それを学問についての方法の議論として展開させた点できわめて独創的な成果を得たといえる。

(2) 当該科研の調査研究の結果、得られた新知見は以下のようなものである。

日本において「史」を編むという作業が、中華の模倣によってはじまり、配列や様式において、漢学的フォーマットの影響下にあったことはいまをまたない。その長い歴史に変革をおこしたのは明治維新であり、またその後の国力の拡大、とくに日清戦争

の戦勝であった。

「東亜」から「大東亜」へとという世界観の展開は、単なる領域意識の拡大とは違い、秩序そのものの塗り替えであった。多くの学者が使命を帯び、「辺土」へと向かい、周縁に周縁ではない価値を見いだそうとした。「中華」の価値は引き下げられ、日本文化には中華からの影響がなかったというストーリーが語られた。ここに江戸時代以来の学問の系譜のみからでは説明ができない近代の日本特殊論が成立する。これは戦後になって戦中期を体験した知識人によって語られた西欧日本特殊論の淵源ともいえる。国際的孤立のなかで、日本特殊論は日本固有論へと転回し、「大東亜」への視野は捨て去られる。政治的関心とともに文化的関心が低迷し、日本の学としてのアジア研究・宗教史研究が縮小していった。

戦後修正を迫られた日本史分野は、「戦後歴史学」を名乗ることで戦中期を切り捨てたが、じっさいには近代日本が創り出した日本古代の評価を取り戻す路線が押しとられた。ために、中華の再評価を試み、唐を強大な大帝国とする20世紀初頭の説明を復権させた。この学説は1970年代半ば以降教科書に採用され、多くの日本史家とくに古代史家が支持するところとなり、中国唐に日本の律令制の祖先を求める風が、いま現在の日本史分野に定着した。

近代日本の自画像の投影としてはじまった国史学は、西欧を援用した日本特殊論や中華を援用した日本特殊論のあいだを往来し、そこから外来の要素をこそぎ落としたものを日本独自とみなし、一種の規範として定着させてきた。しかし実際に日本社会に展開した思想文化の様態は、模倣や複合・変形や形骸化のパターンにおいて、中華に対する辺土と見られてきた地域の思想文化とのあいだに具体的類似が認められ、比較対照して考えるべき面が大きいことが

明らかになった。

上記が当該研究の史学史的具體研究の成果であるが、人文学の方法論に関しても次のような知見を得た。すなわち、研究開始時においては、比較軸が日本対複数の他地域であることを想定していたが、当該科研の総合的成果を得たいま、比較軸は中華対複数の他地域を基本とする検討が有効であり、中華との関係をもつ周縁諸地域の地域的展開のバリエーションのひとつとして、日本を観察することが、ユーラシアの文化的構造や思想の特質を解析し、世界的視野で個々を位置づけ総体をとらえていくことにつながると考える。また、中華だけではなく、さまざまな規模の文化的インパクトとグラデーションが、複合重層的に展開しているということを視野に入れて、あらたな人文知を構築していく必要があるという考えに至っている。

(3) なお、当該研究進捗の過程において、近代仏教の専門家および宗教学者らとの連携があり、情報交換の面で効率が上がったのみならず、成果公表の機会が多岐に及んだ。また国内外を含む調査先関係者の積極的協力が得られ、とくに沖縄調査(2013年度)とベトナム調査(2014年度)では予想しない対象を調査することができ、全体の成果につながった。

引用文献

佐藤 文子・吉田一彦・池美玲・手島崇裕、
国史学とアジアと仏教文物、日本思想史学、
査読無、第 48 号、2016、43-46

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 9 件)

- 佐藤 文子、進化する祭と巫集団 - 韓国江陵端午祭の今 -、人間文化研究所年報、査読無、第 12 号、2017、52-56
- 佐藤 文子・吉田一彦・池美玲・手島崇

裕、国史学とアジアと仏教文物、日本思想史学、査読無、第 48 号、2016、43-46

- 手島 崇裕、
(入北宋僧)・ (平安)
- -、日語日文学研究、査読有、9
8 輯第 2 巻、2016、255-276
- 手島 崇裕、
ガ (黑板勝美) .
、日本思想、査読有、30 号、201
6、97-119
- 池 美玲、群山地域 33 か
所観音霊場成立
一考察、日本学、査読有、42 集、2016
年、217-240
<https://js.dongguk.edu/>
- 池 美玲、韓国における日本仏教研究、
日本仏教総合研究、査読有、14 号、2016、
177-200
- 佐藤 文子、韓国江陵大関嶺城隍祭 集
落における神霊の機能、人間文化研究
所年報、査読無、第 12 号、2016、51-55
- 池 美玲、日帝強占期韓国内日本人 観
音信仰研究、東アジア古代学、査読有、
38 集、2015、443-464
<http://www.dongasia.co.kr/notice/view.php?idx=821>
- 吉田 一彦、The Credibility of the
Gangōji engi、Japanese Journal of
Religious Studies、査読有、42/1、
Trans.by Paul L. Swanson, 2015, 89-107
[https://nirc.nanzan-u.ac.jp/nfile/44
02](https://nirc.nanzan-u.ac.jp/nfile/4402)
- 〔学会発表〕(計 11 件)
- 佐藤 文子、私度僧若しくは僧尼令問題、
京都大学人文科学研究所共同研究班公開
研究会、2016 年 10 月 23 日、京都大学人
文科学研究所(京都府京都市)

- 手島 崇裕、歴史教科書のなかの入宋僧・日宋関係、韓国日語日文学会 2016 年春季学術大会、2016 年 4 月 23 日、慶熙大学校（韓国龍仁市）
- 池 美玲、参詣曼荼羅下段に出る民間信仰に関する検討、東アジア古代学会国際セミナー、2015 年 12 月 12 日、東国大学校（韓国ソウル特別市）
- 佐藤 文子、古代観の組成と日本、日本思想史学会 2015 年度大会パネルセッション「国史学とアジアと仏教文物」、2015 年 10 月 18 日、早稲田大学（東京都新宿区）
- 吉田 一彦、黒板勝美の宗教史研究と国史叙述 仏教・神道・道教、日本思想史学会 2015 年度大会パネルセッション「国史学とアジアと仏教文物」、2015 年 10 月 18 日、早稲田大学（東京都新宿区）
- 池 美玲、いわゆる日帝期朝鮮における仏教文物調査 関野貞の活動を中心に -、日本思想史学会 2015 年度大会パネルセッション「国史学とアジアと仏教文物」、2015 年 10 月 18 日、早稲田大学（東京都新宿区）
- 手島 崇裕、黒板勝美の南洋調査と日本、日本思想史学会 2015 年度大会パネルセッション「国史学とアジアと仏教文物」、2015 年 10 月 18 日、早稲田大学（東京都新宿区）
- 佐藤 文子、史学史の中の国家仏教論（招待講演）就実大学史学会、2014 年 10 月 11 日、就実大学（岡山県岡山市）
- 吉田 一彦、国風文化論の発生（招待講演）就実大学史学会、2014 年 10 月 11 日、就実大学（岡山県岡山市）
- 佐藤 文子、国家仏教論という思想、日本近代仏教史研究会大会、2014 年 5 月 10 日、駒沢大学（東京都世田谷区）
- 佐藤 文子、国家仏教論と固有信仰論の地平を読み解く、仏教と近代研究会シン

ポジウム「日本仏教史像の近代的構築」
パネル発表、2013 年 9 月 14 日、愛知学院大学（愛知県日進市）

〔図書〕(計 3 件)

- 吉田 一彦、集英社、『日本書紀』の呪縛、2016、240
- 佐藤 文子 他、勉誠出版、仏教がつなぐアジア - 王権・信仰・美術 -、2014、336
- 手島 崇裕、校倉書房、平安時代の対外関係と仏教、2014、368

〔その他〕
ホームページ等
<https://fmkst.jimdo.com>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 文子 (SATO, Fumiko)
佛教大学・歴史学部・非常勤講師
研究者番号：80411122

(2) 研究分担者

吉田 一彦 (YOSHIDA, Kazuhiko)
名古屋市立大学・人文社会系研究科・教授
研究者番号：40230726

(4) 研究協力者

池 美玲 (JI, Miryong)
韓国芸術総合大学講師

手島 崇裕 (TESHIMA, Takahiro)
韓国慶熙大学校助教授